

第1部

社会保障を考える

※第1部は、おおむね2012（平成24）年6月末まで（法律案等については8月10日まで）の動きについて記述している。

はじめに

(なぜ、今、「社会保障を考える」のか)

2010年に翻訳出版された米国ハーバード大学のマイケル・サンデル (Michael J. Sandel) 教授による『これからの「正義」の話をしてしよう』が、政治哲学の本としては異例のベストセラーになり、正義論ブームといわれる現象が起こったことは記憶に新しい。

ブームの要因として、「白熱教室」とも譬えられる、例題や実例を提示しつつ、難題を投げかけ議論を引き出し、学生たち自身の考え方や理論を展開させる、サンデル教授の講義手法や対話型の討議の面白さに注目が集まったことが挙げられている。

今回、本白書の作成に当たっては、このような要素に加えてさらにブームの背景を考察し、次のような考えに至った。それは、経済の先行きが見通しづらく、人々の生活も暮らしが上向きイメージが描きにくくなり、格差意識の高まりなどにより社会不安が高まっている日本社会への閉塞感を反映して、社会における「正義」や「善」のあり方について、これまで以上に人々の関心が高まっているのではないかということである。

では、果たして「善き」社会とは何だろうか。様々な考え方や定義はあろうが、多くの人が幸せを感じることができる社会ともいえる。では、今、人々は幸せだろうか。成熟化、多様化した社会の中で、幸せとは何か一概にはいえないが、例えば、生活の上で経済的な問題がなく、社会に参加して、仲間や友人に囲まれて生活できることかもしれない。客観的に見れば、全体的な豊かさの水準は、決して低くなく、多くの人々も健康である。また、科学や技術の進歩等により、一昔前では考えられなかった便利さを享受し、様々なコミュニケーションツールを活用して身近にいない人ともつながれるようになった。

——では、果たして多くの人が幸せを実感しているのだろうか。

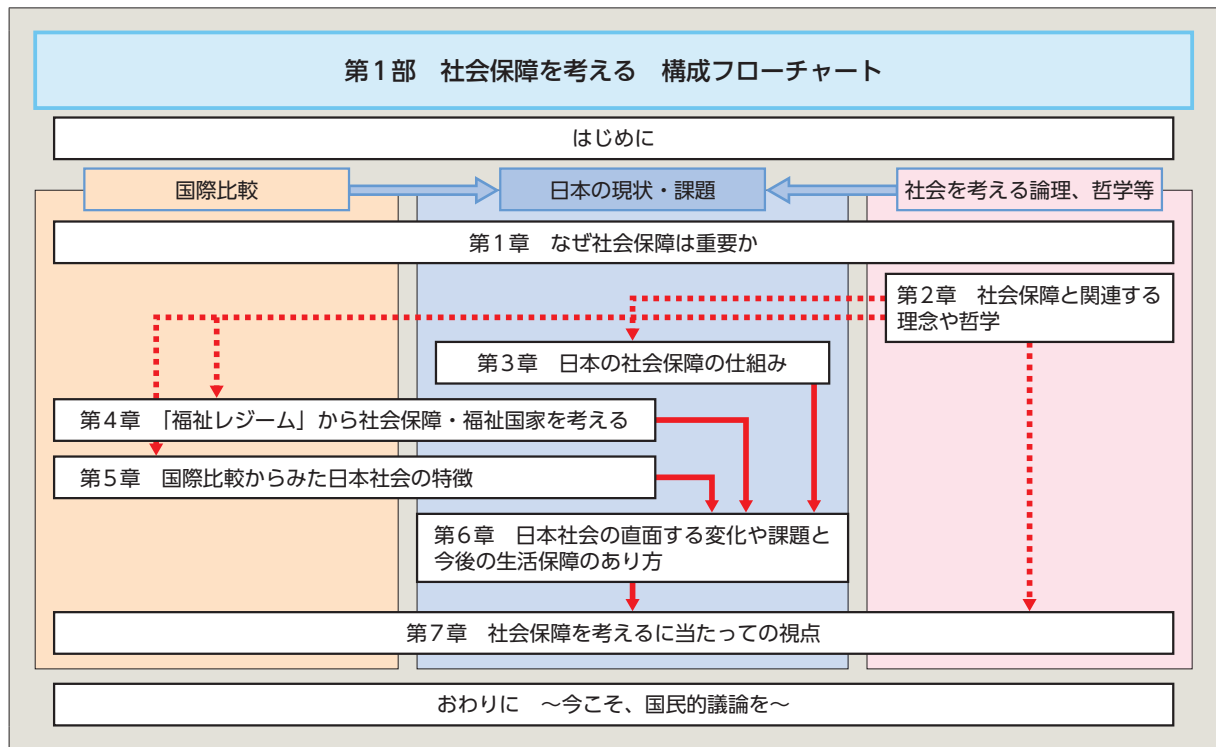
現実にはそうともいえないようである。その要因の一つが、先行きの不透明さや、より良い未来への確信が持ちづらいこと、特に、生活面や社会保障における不安である。社会的格差が拡大傾向にあるといわれ、貧富の格差や社会的排除が身近な存在となっており、実際、若者にとっても就職がこれまで以上に困難となっていることは閉塞状況の表れとみることができる。また、過去に比べて希望が持てない社会ともいわれている。

少子高齢化がさらに進展し、経済の低成長が常態化するなど社会が変化していく中で、社会保障には、もう望みはないのか。社会保障が十分に機能することで、豊かさを現実感あるものとして皆が享受できる可能性はないのか。報道（新聞やテレビのニュース番組）から諸問題の動向を知ること重要であるが、ここでは一歩進んで、そもそも社会保障とはどのような役割を果たすものなのか、今こそ考えるときであるといえる。

現在、日本の社会保障制度は、急速な少子高齢化に代表されるように社会経済情勢が大きく変化する中で改革の必要に迫られており、もはや先送りできない局面にある。現状を正しく把握した上で、どのような社会を目指し、どのような社会保障制度を設計するか、国民全体で考える時期に来ている。

そこで、平成24年版厚生労働白書第1部は、「社会保障を考える」というテーマを掲げた。日本の社会保障の目的や機能、日本の社会と社会保障の現状、これからの課題等について、国際比較、意識調査結果や社会を考える論理、哲学等も紹介しながら、社会問題への関心が形成される時期にある学生等の若者世代も読者と想定して、可能な限りわかりやすく説明している。

(第1部の構成について)



次に、第1部の構成を順に説明する。

第1章「なぜ社会保障は重要か」では、先進諸国及び日本の近代社会の形成と発展過程を踏まえて、社会保障の誕生及び発展の経緯や現在の動向を説明し、社会保障が現代社会において果たす機能・役割の重要性を説明する。

第2章「社会保障と関連する理念や哲学」では、自立と連帯、効率と公正といった、近代・現代の社会のあり方や社会保障を考える際に必要な基本的な概念のうち、代表的と考えられるものを取り上げて説明する。

第3章「日本の社会保障の仕組み」では、現在の日本の社会保障制度の全体像を紹介するとともに、その主要な特徴である「国民皆保険・皆年金」をはじめ、各制度の概要を分かりやすく説明する。

第4章「『福祉レジーム』から社会保障・福祉国家を考える」では、先進諸国の社会保障の特徴を、「福祉レジーム」という類型化の概念をベースにして概説するとともに、現在の日本の社会保障の形を把握した上で、福祉レジーム論から示唆される今後必要な取り組みや検討の視点を説明する。

第5章「国際比較からみた日本社会の特徴」では、OECDの統計指標などを用いて国際比較を行い、日本の社会や社会保障の特徴や課題について説明する。

第6章「日本社会の直面する変化や課題と今後の生活保障のあり方」では、日本が現在直面している少子高齢化、経済の長期的低迷、経済のグローバル化、雇用環境の変化、国債残高の増大、格差の拡大、家族・地域のつながりの希薄化といった社会変化の現状と課題について概観し、その変化に対応した生活保障のあり方について、家族、地域社会、企業・市場、政府のそれぞれの役割から展望する。

第7章「社会保障を考えるに当たっての視点」では、社会保障について考える上で重要な視点を提示するとともに、自身の利害だけでなく他者の立場で考えることの重要性を説明する。

最後に、「おわりに～今こそ、国民的議論を～」では、社会保障のあり方について、この国の主権者であり、社会保障の受益と負担の当事者である国民一人ひとりが考え、国民的議論に主体的に参加していくことを呼びかける。

また、第1部の末尾では、参考として、「現在の社会保障改革に向けた取組み（社会保障と税の一体改革）」について紹介し、政府の取組みについて概説する。

平成24年版厚生労働白書が、「社会保障を考える」際の一助として活用されることを願っている。

読者の皆さんへ (読み方ガイド)

第1部は、第1章から順番に読んでいくと最も体系的に「社会保障を考える」ことができるよう構成しているが、多忙な現代社会に生きる読者の興味・関心に応じて、どの章からでも読むことができるようにしてある。

例えば、

- まずは、現行の社会保障制度がどうなっているのかを知りたい。
→第3章 日本社会保障の仕組み
- 今の日本の社会はどのように変化していて、どのような課題があるのか知りたい。
→第6章 日本社会の直面する変化や課題と今後の生活保障のあり方
- 国際的な観点から社会保障のタイプや関連する指標を概観したい。
→第4章 「福祉レジーム」から社会保障・福祉国家を考える
→第5章 国際比較からみた日本社会の特徴
- 社会保障を、その起源に遡って知り、現在までの歴史的流れを知りたい。
→第1章 なぜ社会保障は重要か
- 大体のことは知っているが、どうやって社会保障を考えればいいのか。
→第7章 社会保障を考えるに当たっての視点
→第2章 社会保障と関連する理念や哲学

といった読み方もある。

読者それぞれの方法で理解を深めていただきたい。